

シューマンのピアノ五重奏、弦楽四重奏にピアノがプラス、重厚さアップ骨太の響き、聴き手の心をズシン圧倒。真夏にコッテリ重量級、各ソリストの主張、流れる汗ものともせず集中、ゴツゴツ感なく融合、会場全体は聞き耳緊張の支配。フロレスタンとオイゼビウス、ゆったり余裕満を持してのキャラ交代、シャキシャキ目まぐるしさは希薄。2楽章「行進曲風に」、「色とりどりの小品」の7曲のモチーフの萌芽。古い人間だから説明トークは苦手、イマジネーションの愉しみが削がれる気がして、まして楽章毎にウーン。でも本日のシチュエーションさもありなん、猛暑と作品の市民権の少なさとシューマンさんの八艘跳びの思考パターン、アタマをリセットするには必要。

最初のカノン初めて、You Tubeで予習、いつもながらの付け焼刃。甘いメロディーをコレデモカコレデモカ、そこがチャームポイントなんだろうが、ロマンシズムどっぷりには少々たじろぎ気味。チェリストが椅子に腰掛け演奏開始、他の3名楽器を弾きながら時間差登場、その後定位置でまったりと旋律を奏でる。以前に、ルクレールさんの「ヴァイオリンソナタ」で演奏しながら順次退場、そんな場面をどこかで体験。ベートーヴェンの「弦楽四重奏曲 Op.131」から、4楽章かなと思いきや5、6、7楽章、場面のチェンジで気分転換、漸次収まりを目指す、ベートーヴェン・ワールドの高み、停滞ドブプリよりこの方が可かも。

モーツァルトの「ピアノソナタ ハ長調 K.545」、アブラゼミの大合唱が聞こえる中、爽やかに疾走そしてゆったり優美に、貴族の館が似合う作曲家、田園の蟬時雨はアンマッチ、だが共存なしの独自路線で成立。「英雄ポロネーズ」は競い合いにて、ブリリアント箇所多少相殺。(

2019.8.14)

パッヘルベル：カノン

日本の名曲メロディー：夏は来ぬ、海、浜辺の歌

ベートーヴェン：弦楽四重奏曲 14番 嬰ハ短調 Op.131から5、6、7楽章.

モーツァルト：ピアノソナタ ハ長調K.545

ショパン：ポロネーズ 6番 変イ長調 Op.53「英雄」

シューマン：ピアノ五重奏曲 変ホ長調 Op.44

(アンコール)<BR>

ショパン：ワルツ 6番 変ニ長調 Op.64-1「小犬のワルツ」

富山民謡：おわら(弦楽四重奏用オリジナルヴァージョン)

